二代目団十郎と江戸の開帳興行

――不動明王を中心に――

ビュールク・トーヴェ

はじめに

神仏を舞台に登場させる歴史は日本の演劇史そのものとほぼ一致している。江戸歌舞伎の場合、有名な例は代々市川団十郎が演じた不動明王であり、特に注目されたのは成田山新勝寺の江戸出開帳の際に上演されたものである。

元禄から宝暦にかけて江戸で諸寺院の集金のために行われた開帳興行が増加し、その盛況に便乗した歌舞伎の演出も行われる[1]。服部幸雄氏は「成田不動尊と代々の市川団十郎」で江戸庶民の信仰を元禄歌舞伎における神霊事の発展の原点として論じている[2]。

服部氏がいうように初代、二代目団十郎はさまざまな神仏を演じたが、とくに不動明王を勤めて名声を高めた。また、演出の経済的側面については比留間尚氏が概観しているが[3]、個々の歌舞伎役者と寺院の関わりについては未だ明確になっていない。そこで本稿では、二代目団十郎と江戸の開帳興行の関係や不動明王の演出が定着した実態を明らかにする。進め方として、第一章で、二代目団十郎の日記抜き書き本『柿表紙』や『栢莚日記』、『病中日記』[4]をもとに彼の不動信仰のさまを明らかにし、第二章では不動明王の演出の由来や元禄末期における初代団十郎の不動明王及び開帳興行に関わる演出について明確にする。そして第三章では、二代目団十郎の演出と開帳を催す諸寺院の関わりについて明らかにし、さらに第四章において、不動明王

演技の開帳興行からの独立や市川家の「家の芸」としての定着について述べる。

なお、役者は全盛時の名称を用い、引用文には必要に応じて濁点や句読点・振り仮名を施し、旧字を通行の字体に改めた。

第一章　二代目団十郎と不動信仰

まず、初代と二代目団十郎の宗教観について述べる。初代団十郎の自伝書「元禄六歳市川団十郎願文」および「元禄九歳市川団十郎願文」（以下「願文六・九」と略す[5]）には三宝荒神、元三大師、大日、不動、愛染明王などの神仏に祈願したというが、墓は常照院（芝増上寺山内）にあり、宗派は基本的に浄土宗だったと服部氏が推測している[6]。二代目団十郎の日記に、芝増上寺の四十代目大僧正衍誉利天[7]との対面（享保十九年六月十一日）や、祐天寺の方丈二代目祐海[8]の説法を聞き（同十九日）、感動で泣き出した記述もあるので、二代目団十郎の場合、浄土宗への関心はより明確である。

不動信仰の中心は災いを除き、あるいは仕事に出世し、恋愛を成就させるなどにあり、その利益のために護摩を焚く修法である[9]。浄土宗は鎌倉初期から普及すると不動信仰に影響を与え、不動明王も徐々に死者を浄土へ導く役目を務めるようになり、庶民の信仰として流布した。そして、服部氏が注目するように、江戸中期には芝増上寺の第三十六代目大僧正祐天上人が成田山新勝寺の不動尊に祈願して学力を得たという説話が江戸中に流行し、浄土宗と不動信仰はより緊密な関係を持つようになった。

劇書『古今役者論語魁』（明和九年刊）には「成田山不動尊に親よりハ能役者に成下さるべしと願かけしが、親団十郎ハ八百両、拙者ハ千二百七十両まで相取」とあり、二代目団十郎は成田山の不動明王に親を超える役者になるように祈祷したようだ[10]。祈願したのは宝永末期だったと推測され、享保六年には千両役者になり、出世の希望が叶ったので成田山に参詣した[11]。不動信仰は立身出世のために利益があったと思っていた。

二代目団十郎本人の不動信仰に関わる記述としては以下も注目される。

一つは二代目団十郎の母が目黒瀧泉寺の不動尊に近い行人坂に隠居し、団十郎家の別荘もその辺りにあったこと[12]。団十郎家が目黒で過ごす夏の休みの間にたくさんの寺院に参詣し、中でも瀧泉寺には三回（享保十九年六月十八日、二十三日、二十八日）参って、院代に庭や池の子鳥を特別

にみせてもらったことが記されており、瀧泉寺の関係者と親しかったようだ。

不動信仰の内容に触れた記述としては、享保二十年の大病がある。二代目団十郎は病中で大黒神（九月二十七日）や恵比須（同二十九日）へも祈祷したが、十月十四日には息子升五郎が成田山に参詣して全快した気分になり、翌日、全快の祝いに雀を放して「命長き雀は蓬莱山にあふみなる多賀のやしろに幾代経ぬらん」と上機嫌に狂歌を詠んでいる。そして、同年十一月の顔見世の際には舞台復帰とともに息子に団十郎の名前を譲り、その口上での全快したのは不動明王のおかげだと述べた[13]。

こうした不動明王の利益に感謝する口上は宝永六年にも例がある[14]。この時は、市村座八代目座元羽左衛門の病気が全快したのは不動明王の利益のためだったことが口上で語られ、さらに、京都・浄花院の泣不動明王の出開帳を上演の趣向にした。もっとも、二代目団十郎の不動明王の利益への関心は当時の歌舞伎役者の中では珍しいものではなかったようで、歌舞伎界における不動信仰への関心の高まりが、歌舞伎の演出にも影響を与えたのだろう。

第二章　元禄歌舞伎における不動信仰と演出

本章では不動明王の演技の由来及び初代団十郎の演出と開帳興行との関わりについて考察する。

①　不動明王の演出の由来

不動信仰は鎌倉初期から庶民信仰として成立し、利益の説話や、不動の利益を見せる絵巻物も作られるようになった[15]。泣不動説話は、三井寺の和尚が大病で倒れ、一人の弟子が師匠の代わりに病気を受けるということを不動明王に祈ると、不動像が泣き出し、僧たちの身代わりとして地獄に行くので、病気が治るという話である。そのもっとも古い上演記録は宝徳四（一四五二）年の世阿弥作の謡曲「泣不動」で、登場人物のシテ前は童子、後は不動明王、ワキは山伏だった[16]。

江戸歌舞伎における不動明王の初出は元禄八年七月、山村座で上演された「一心二河白道」の五番目である。前出「願文九」には「盆十四日よりは一心二河白道、五番続、五番目に不動有り、夥敷はんじやう」とある[17]。表1にあるように、元禄八年から十六年までの八年間には不動明王の上演は少なくとも十一回確認できる。中でも上演回数の多

いのは元禄十年（三回）と十四年（二回）である[18]。

比留間氏の「江戸開帳年表」では元禄十五年（一回）と十六年（三回）の計四回、不動尊の開帳が見え、次の二年間にはまた三回行われ、不動明王が江戸で非常に流行した時期だったことがわかる[19]。

「一心二河白道」の元禄八年の上演についての他の資料は見当たらないが、寛文十三年刊の古浄瑠璃正本「一心二河白道」で桜姫を冥土から救い出すのは阿弥陀如来の利剣である。歌舞伎ではそれを不動明王の利剣としたのではないだろうか。翌年、山村座の座元長太夫が不動明王を演じ、またその次の年、元禄十年二月、森田座で「岩屋不動」、坂東又太郎が不動明王、西国兵五郎は脇士勢多迦（せいたか）、さらに座元森田勘彌が金剛不動を演じており、元禄中期から歌舞伎におけるさまざまな形態の不動明王の演出が流行するようになったのである。

②　初代団十郎の不動明王

初代団十郎のもっとも有名な不動明王の演出は、元禄十年五月「兵根元曽我」と元禄十六年四月「成田山分身不動」である。

前者は二代目団十郎（当時九蔵）の初舞台で、初代団十郎と市川団之丞の口上では十歳だった二代目団十郎を「不動の申子」として江戸の観客に紹介した[20]。

「兵根元曽我」の二番目は謡曲「調伏曽我」の趣向で、曽我五郎（初代団十郎）は工藤祐成と対面し、脇指しで工藤を討とうとするが、別当に止められ、自分の無力に絶望する。謡曲では僧侶が護摩を焚くと不動明王が出現し、工藤の人形の首を討つ。これは五郎の仇討ちが成功する吉兆として解釈され、劇が終わる[21]。これに対して、「兵根元曽我」では五郎は不動尊に祈祷してから、超人的な力が漲ってきたという。さらに、通力坊（二代目団十郎）が仙人の姿で舞を見せて、不動明王に変身する。

この場面には謡曲「泣不動」からの影響もあったようだ。謡曲ではワキは山伏、シテは童、のち不動尊だった。前半では童や怨霊、幽霊などが使う黒頭の鬘やべしみの面を被り、小袖の上に水衣あるいは狩衣を着て、扇子を持ち曲舞するが、後半には打杖で神通力を見せる[22]。「兵根元曽我」の図版を見ると通力坊は面こそつけないがそれ以外には「泣不動」のシテにそっくりの衣装や小道具を用いている。

興行は大当たりで、団十郎の息子は「不動の申子」という触れ込みがあったために、成田の周辺の人々が数多く見物したという。『歌舞伎年表』によると観客は一日で十貫文

不動明王の演出

作　者	役　者	資　料	開帳
初代団十郎	初代団十郎	願	
	山村長太夫	願	
	坂東又太郎（不動明王）、西国兵五郎は脇士勢多迦（せいたか）、森田勘彌（金剛不動）	年	
初代団十郎、中村明石	二代目団十郎（金剛明王）	傑	
初代団十郎	初代団十郎、二代目団十郎（二躰不動）	金	
初代団十郎	不動像は舞台道具	傑、『歌舞妓十八番考』	
中津惣十郎、中津五左衛門	山川日彦五郎	傑	有
未詳	生嶋大吉（小幡、のち不動明王）	国	有
初代団十郎	富沢半三郎（新開荒四郎後不動）	傑	
初代団十郎	初代団十郎（胎蔵界の不動）、二代目団十郎（金剛界の不動）	傑	有
	初代団十郎、二代目団十郎二躰不動（成田）	傑	
中村伝七	市村竹之丞口上、泣不動	年、『役者謀火燧』	有
	団十郎の今井四郎兼平がからくり不動像の中から登場	年、『役者色茶湯』	
	口上	年、『役者芸品定』	
未詳	市川団蔵（鬼王、大山不動堂）	年、『役者色紙子』	
津打治兵衛	二代目団十郎（不動明王）、市村満蔵（こんがら童子）、三代目団十郎（せいたか童子）	『三座せりふよせ』、年、紋、『役者三津物』	有
江田弥市か	二代目団十郎口上	年、『役者福若志』	
江田弥市か	二代目団十郎（目黒不動）、三代目団十郎（目白不動）、初代大谷広次（目赤不動）、八代目市村羽左衛門（目青不動）	年、『役者多名卸』	
藤本斗文	二代目団十郎（渡辺、頼光、不動明王）三代目団十郎（四天王、愛染明王）	年、日、『役者柱伊達』	
安田蛙文、田中万助、津打半十郎	二代目団十郎（久米寺弾正、鳴神、不動明王）好評、大入り。	年、日、『歌舞伎台帳集成』第四巻、『佐渡島日記』、『役者披顔桜』、『役者和歌水』	
	二代目団十郎（鳴神不動尊像）	年、『役者艶庭訓』	
藤本斗文など	愛染明王が五郎（亀蔵）には力を与える。	年、『役者独案内』	
藤本斗文	二代目団十郎（曽我五郎の幽霊＝愛染明王の見立て	年、『役者大峰入』、『栢莚舎事録』	有
津打治兵衛	二代目団十郎（目黒不動）	年、『役者懸想文』	

表1

	題　名	年　月	劇場
○	「一心二河白道」	元禄八（1695）年七月	山
	「後藤左衛門地獄讃嘆」	元禄九（1696）年六月	山
	「岩屋不動」	元禄十（1697）年二月	森
○	「兵根元曽我」	元禄十（1697）年五月	中
○	「小栗十二段」	元禄十（1697）年十一月	山
○	「源平雷伝記」	元禄十一（1698）年九月	中
○	「出世隅田川」	元禄十四（1701）年三	中
	「愛護十二段」	元禄十四（1701）年三	山
	「傾城浅間曽我」	元禄十六（1703）年正月	山
○	「成田山分身不動」	元禄十六（1703）年四月	森
○	「小栗十二段」	元禄十六（1703）年七月	森
	「女帝愛護の若」	宝永六（1709）年盆	市
○	「三巴家督開」	享保元（1716）年十一月	中
○	「鳥坂城鶴巣籠」	享保六（1721）年十一月	中
	「初緑あいおい曽我」	享保十三（1727）年正月	森
○	「相栄山鳴神不動」	享保十八（1733）年七月	市
○	「混源七小町」	享保二十（1735）年十一月	市
○	「四人不動」	元文元（1736）年九月	市
○	「潤清和源氏」	寛保元（1741）年八月	中
○	「鳴神不動北山桜」	寛保二（1742）年正月	佐
○	「藤戸日記」	宝暦元（1751）年七月	市
	「楪姿視曽我」	宝暦二（1752）年正月	市
○	「百千鳥艶郷曽我」	宝暦四（1754）年春	中
○	「惶弓勢源氏」	宝暦五（1755）年十一月	中

○＝初・二代目団十郎が不動明王を演じた。

▲＝初・二代目団十郎が演出に係ったが不動尊を演じなかった。

年＝『歌舞伎年表』、傑＝『元禄歌舞伎傑作集』、願＝「元禄九歳市川団十郎願文」（『団十郎ノ芝居』）、紋＝『芝居紋番付』（国会図書館蔵）、国＝国会図書館蔵絵入狂言本、金＝『金の揮』、日＝『二世市川団十郎日記抄』（『資料集成二世市川団十郎』）

おける開帳興行の演出

役　者	資　料	開帳興行	開　帳
	『西鶴俗つれ〳〵』（元禄八年刊）	浅草寺観音の延宝五年開帳か	有
初代団十郎（蒲田兵衛、のち毘沙門）、萩野沢之丞（弁財天）	年、絵	深川海一万坪築立弁天	郡司氏論（注1）による。
山川彦五郎（不動）	傑	真正極楽寺（真如堂）か	有
生嶋大吉（小幡、のち不動明王）	年、国	真正極楽寺（真如堂）	有
初代団十郎（文覚）二代目団十郎（弟子）	国	真正極楽寺（真如堂）	有
初代団十郎（毘沙門）	金	「七月はしぎのびしや門かい帳」が、未詳。	
富沢半三郎（新開荒四郎が不動に変身）	国、傑	元禄十五年～十七年には六回不動開帳があったが、どれに係ったかは不明だ。	有
初代団十郎（胎蔵界の不動）、二代目団十郎（金剛界の不動）	傑	成田山新勝寺	有
初代団十郎、二代目団十郎二躰不動（成田）	傑	開帳の名残	
四の宮源八（融通上人）に文殊菩薩が出現する	傑	土佐国五台山文殊菩薩	有
竹之丞口上、泣不動	年、『役者謀火燵』	京都、浄花院・泣不動	有
団十郎（五郎、徳兵衛）佐野川万菊（お初）	年、『役者五重相伝』シカゴ・ボストン美術館、大英博物館蔵の浮世絵	浅草浅草寺	有
口上	年、『役者芸品定』	成田山の下総国など巡業開帳と関わるか。	『成田山新勝寺史料集』
	年	武蔵野隅田川　木母寺、梅若丸か	有
団十郎（歳玉売り）、升五郎、亀三郎（鞘当たり）	年、紋、ボストン美術館蔵浮世絵	開帳ないが、浅草門前	
市村羽左衛門（本田よしみつ）、三番目には善光寺如来の水からくり	「享保十九年春狂言本」ボストン美術館	「八月開帳」と「せんこうじの如来」が文中にあるが未詳。	
団十郎（曽我十郎、白酒売り）	『役者三津物』、『三座せりふよせ』、『総角助六狂言之記』国、紋	嵯峨清涼寺、釈迦如来	有
二代目団十郎（不動明王）、市村満蔵（こんがら童子）、三代目団十郎（せいたか童子）	『三座せりふよせ』、紋、『役者三津物』	成田山新勝寺	有
二代目団十郎（鬼王）、三代目団十郎（曽我五郎、虚無僧）	「市村座狂言絵本」国、年、日	一月寺	「開帳差免帳」（国会蔵）
二代目団十郎（曽我五郎の幽霊＝愛染明王の見立て）	『役者大峰入』、『栢莚舎事録』	西大寺	有

表２　江戸歌舞伎に

	題　名	年　月	座	作　者
	「浅草観音開帳」	延宝五年頃か	市	
▲	「龍女三十二相」	元禄十一（1698）年六月	中	初代団十郎、 中村明石清三郎、 中村清五郎
○	「出世隅田川」	元禄十四（1701）年三	中	初代団十郎
	「愛護十二段」	元禄十四（1701）年三	山	中津惣十郎、 中津五左衛門
▲	「日本祇園精舎宝寺開帳」	元禄十四（1701）年五月	中	初代目団十郎
▲	「当世酒呑童子」	元禄十四（1701）年七月	中	初代団十郎
	「傾城浅間曽我」	元禄十六（1703）年正月	山	
○	「成田山分身不動」	元禄十六（1703）年四月	森	初代団十郎
○	「小栗十二段」	元禄十六（1703）年七月	森	初代団十郎
	「けいせい隅田川」	宝永元（1704）年二月	山	未詳
	「女帝愛護の若」	宝永六（1709）年盆	市	
○	「開闢元服曽我」	享保四（1719）年正月	中	
○	「鳥坂城鶴巣籠」	享保六（1721）年十一月	中	
	「春駒隅田川」	享保十二（1727）年閏正月	市	
○	「傾城福引名古屋」	享保十六（1731）年正月	中	
	「三国伝来栄花聟」	享保十七（1732）年七月二十日から	市	津打治兵衛
○	「英分身曽我」	享保十八（1733）年二月	市	津打治兵衛
○	「相栄山鳴神不動」	享保十八（1733）年七月	市	津打治兵衛
○	「振分髪初買曽我」	享保二十（1735）年正月	市	江田弥市、 津打半助
○	「百千鳥艶郷曽我」	宝暦四（1754）年春	中	藤本斗文

○＝初・二代目団十郎が不動を演じた。
▲＝初・二代目団十郎が演出に係ったが不動尊を演じなかった。
年＝『歌舞伎年表』、傑＝『元禄歌舞伎傑作集』、金＝『金の揮』、日＝「二世市川団十郎日記抄」（『資料集成二世市川団十郎』）、国＝国会図書館蔵絵入狂言本、紋＝『芝居紋番付』（国会図書館蔵）、絵＝『絵入狂言本集』、有＝「江戸開帳年表」

も賽銭を舞台に投げたほどだった。興行を終えると、団十郎親子はお礼に成田山新勝寺に参詣し、屋号として成田屋を使うようになったという。

同年の顔見世興行「小栗十二段」では親子が二人の不動尊を演じたが、今度は不評だった[23]。次に好評を得た不動明王の上演は元禄十六年四月の「成田山分身不動」で、内容は『太平記』第三十七巻などにある「一角上人」の伝説やそれに関わる謡曲をもとに作られている鳴神上人の筋である[24]。上人が竜神を封印したために雨が降らなくなる。人々が干魃に困っているので、美女は酒と色香で上人の通力を弱め、竜神を逃がす。この設定で不動明王を用いるのは元禄十一年の「源平雷伝記」が初出だが、この時には鳴神が不動像を壊し、ただの舞台道具として用いたようだ。

元禄十六年上演の際、鳴神は黒主仙人と名乗り、雲の絶間は小野小町という趣向だった。演出で「源平雷伝記」と大きく異なるところは、黒主（鳴神）は死なないということである。通力を失い、憂いや後悔を感じ、成田山不動尊に祈願し、その分身となる。結末として、関寺の辺で狂気になった小町の前に胎蔵界（初代団十郎）や金剛界（二代目）の不動明王が現れ、小町の乱心を調伏することで成田山の不動尊の利益を見せる。

同時に、四月二十七日から六月二十八日の間、深川永代寺八幡宮境内で、成田山新勝寺の初めての江戸出開帳が行われた。「江戸開帳寄進帳」[25]によると、開帳の目的は本堂の普請のために金五百両を集めることであった。尾張名古屋藩主の奥方など身分の高い女性が数多く参詣し、生嶋新五郎や同門の大吉のような当時の女中に人気があった役者も開帳場に参上した。森田座で「成田山分身不動」に出演した団十郎親子や女方萩野沢之丞、座元森田勘弥の寄進の記録もあり、総合集金は二千百二十両を上廻るほどの大盛況であった。

森田座も大入りが続き、開帳興行は七月に納まるが、団十郎は元禄十年の失敗作「小栗十二段」にあった二人の不動の場面を成田山不動に変更し、再演する。開帳興行の余韻をなるべく長く利用しようとしたのである。

初代団十郎は下総の出身で不動信仰に篤かったことは確かだが、歌舞伎界の競争も「成田山分身不動」の上演の理由として考えられる。

上方では人形浄瑠璃からの影響が強かったので開帳興行が頻繁に歌舞伎の舞台に上げられた[26]。一方、江戸では表2にあるように、延宝五年の浅草観音の開帳にかかわった

上演があった可能性もあるが[27]、確実に開帳興行と関連する上演は元禄十一年上演の「龍女三十二相」を嚆矢とする。これは深川の弁天開帳を取り入れ、弁天や毘沙門が登場する。元禄十四年の春と夏には四つの興行があり、一つは未詳だが、その他の三つの上演は真正極楽寺（真如堂、本尊阿弥陀如来、脇士寿長不動）の三月から行われた江戸出開帳と関わっていたようだ。「愛護十二段」以外は初代団十郎の作品だった。

三月から初代団十郎作「出世隅田川」が上演され、二番目に山川彦五郎が演じる不動の趣向があったが、開帳興行との関連ははっきりしない。それに対して、同時に山村座で上演中だった「愛護十二段」の五番目では「愛護、百合姫の枕元へ王子、勝姫の怨霊出。様々仇をなすを、側なる如来の御影剣となり、小幡が枕へ落れば小幡は不動になり、二人の怨霊を切払ふ。これも真如堂弥陀の方便なれば開帳せんとて」[28]と明確な関連がある。不動明王を演じたのは軽業や所作を得意とした女方生嶋大吉だった。

すると、初代団十郎は「日本祇園精舎宝寺開帳」（元禄十四年刊、国会図書館蔵）という作品を五月に出す。ここでは初代と二代目団十郎が文覚とその弟子を演じ、開帳興行への関連は濃い。当時の劇場が開帳興行を取り込む趣向で競い合っていたことは明らかであろう。

団十郎の「成田山分身不動」の上演は、こうした開帳興行に関わる趣向によって集客のために競合が発生していた、当時の歌舞伎界の動向にもよるのだろう。

第三章　二代目団十郎における開帳興行の演出

初代団十郎は「成田山分身不動」の上演の翌年に市村座の舞台で刺殺される。表2をみると、この時から二代目団十郎が没した宝暦八年までの五十四五年間、開帳に関わる十一回の歌舞伎興行を確認できる。全体的には元禄期ほどの勢いで開帳興行に関わる活動は続かなかったが、中では七回、二代目団十郎の開帳に関わる演出が見える。拙稿[29]で示したように、二代目団十郎は興行の内容について少なからぬ発言力を持っていたので、初代のように脚本を書かなかったが、演出を支配することができた。本章では、そうした演出の意義を明確にするために、内容及び開帳興行を催す諸寺院との関係について検討する。

①　二代目団十郎の開帳に関わる演出

以下では浅草寺（ア）や成田山新勝寺（イ）、そして金龍山一月寺（下総国小金村・現千葉県小金市）（ウ）の開帳興

行に関わる三つの例を挙げる。

（ア）享保四年正月に中村座で上演された「開闢元服曽我」には三月十八日から五月二十八日の間に行われた浅草寺の観音尊の開帳の宣伝が含まれた。一番目では浅草の開帳興行を鎌倉幕府の初期に変更し、団十郎が暫の場面を新しい趣向で演じて大評判となった[30]。浅草寺に開帳興行の許可がおりたのは同年正月二十七日であり、公の知らせは翌日に行われたが[31]、開帳はもうすでに町中の話題となっていたために、中村座は事前に宣伝したのであろう。そして、開帳の初日には『歌舞伎年表』に「浅草開帳につき、三座手明の役者、札売場並霊宝場へ出でしが、間もなく止めらる」とあるように、江戸三座の立役者が開帳場に参上したが、その活動が禁じられた。禁止の理由は知られていないが、人気役者の登場が開帳場を混乱させるほど盛況させたのであろうか。

その後も、中村座の二番目に佐野川万菊や団十郎が演じる「曽根崎心中」の場面を浅草門前の茶屋に変更させ、開帳場の宣伝を手厚く盆狂言まで続けた[32]。

また、団十郎と万菊の姿が描かれているボストン美術館蔵の浮世絵には団十郎の衣装に「ひしや、三浦屋、弐町目、伏見町、江戸丁、山口屋」という享保五年刊の『吉原丸鑑』[33]にも確認できる町名及び茶屋の名前が書かれており、浅草観音の宣伝とともに吉原の茶屋も宣伝されたようだ。開帳興行がない時でも浅草寺と歌舞伎界の良縁は続いている。例えば享保十六年には浅草観音に開帳興行はなかったが、ボストン美術館蔵の浮世絵「傾城福引名古屋」には二代目団十郎の浅草観音門前に歳玉を売る商人とともに、子役三代目団十郎と沢村亀三郎が浅草観音の初詣に鞘当をする場面が描かれるように、浅草観音の賑わいに役者が果たした役割は大であった。

（イ）享保十八年の七月、成田山の二回目の開帳の際、開帳興行を中心にした演出が再び行われた。

盆狂言「桐栄山鳴神不動」の立作者は二代目津打治兵衛であり、二本のせりふ正本が現存する[34]。二番目からの二代目団十郎の「鳴神上人方便の勇力せりふ」の挿絵には、乗物の屋根に座った鳴神が描かれ、「おさなき時はこんがら小僧、ちごとなつてはせいたか丸、今びんはつまろめては、こんたい両部の大日大聖、不動明王坊らいゑん」と子供の頃の不動明王の演技を踏まえて、今度は大日大聖不動明王となることを報告する。番付集『芝居紋番付』（国会図書館蔵）からこの不動明王の登場は二番目であったことがわかる。三番目「鵜上戸指掛傘」の鳴神上人と雲の絶間の

酌の場面は不動明王の出現の後に行われており、元禄十六年上演とかなり異なる演出だったようだ。

もう一本のせりふ正本は「雲のたえま　なを姫　瀬川菊次郎　ほめことば　堺町葺屋町　茶屋家名づくし」であり、劇場周辺の茶屋を宣伝する場面も取り入れ、芝居町の全体的な繁昌を目指す趣向だった。

成田山新勝寺の史料「照朝代江戸佐倉願書控」[35]によると享保十七年四月、不動堂や金桜堂、仁王門など建物の屋根が破損し、水漏れになったので、江戸で出開帳の許可を申請した。江戸出開帳は三十三年ごとに許可されるが、第一回目の開帳からは三十年以上経つので、翌年に元禄十六年と同じように募金したいというのである。結局、前回と同様に、深川永代寺八幡宮で七月朔日から九月朔日の間の開帳が許された。開帳興行にはさまざまな準備を調え、たとえば八十九坪の仮小屋が開ける場所をも用意するなど、大勢の参詣人を見込んでいた。

しかし、今度は元禄十六年のようにはいかなかった。評判記『役者三津物』（享保十九年正月刊）には「又盆狂言の鳴神上人、成田不動は、じまんの御家の芸とて、のんだやうに思はれた所の、矢さきがはづれてあたらなんだ」とあるように、演出は当たらなかった。

そして、前出「照朝代江戸佐倉願書控」をみると、開帳興行も八月中には「七月朔日より九月朔日迄開帳相勤申候、然ル所先月中より世間一等之風邪、殊ニ当月初日より雨天多、参詣曽而無御座候」と、風邪の流行や悪天候のため開帳は不景気であったらしく、二十日間の延期を申請している[36]。

（ウ）さらに、開帳興行に関わる演出の例が享保二十年の「振分髪初買曽我」にもある。この時三代目団十郎（徳弁）が虚無僧のやつしを演じた。これは虚無僧寺の最高位であった一月寺[37]（松戸市小金、千葉県）の同年三月朔日から回向院で行われる開帳興行と一致した上演だった。

虚無僧の舞台上の姿は、天蓋と呼ばれる深い編笠を被り、尺八を吹きながら乞い、武士階級に限定した普化宗の僧の姿がモデルで、浮世草子『好色艶虚無僧』（元禄九年刊）や元禄十二年正月興行「けいせい仏の原」で初代沢村藤十郎が演じた虚無僧から流行し、仇討ちをするロマンチックな男伊達として上演され、二代目団十郎も正徳五年に中村座の正月狂言「坂東一寿曽我」において曽我五郎を虚無僧として演じている。享保二十年、虚無僧の場面は二月五日に舞台に掛けられ、日記によると二日後「札売切申候間、明日御出」という張り紙を入り口に出し、劇場が売

り切れるほどの大入りとなった。三代目団十郎は尺八が得意で、舞台で実際に尺八を吹き、団十郎家と昵懇な六代目平戸藩松浦篤信はその演出に感動して、三代目団十郎に高価な尺八の袋（正月十八日）や尺八（二月十二日）を贈るほどであった。

しかし、舞台上の演技だけではなく、二月二十五日には団十郎は次のように記す。

昨日小かね一月寺より開帳の本尊入仏故、こも僧三十人余むかひに出、きらびやか成事也。徳弁が師匠義好丈もこも僧にて被出候よし。

つまり、大勢の虚無僧が一月寺の出開帳を出迎えるために集まり、三代目団十郎と「師匠義好丈（三代目団十郎の尺八の師か）」も参加し、開帳場を賑わせたのである。

以上三つの例から判断すると、元禄歌舞伎では開帳に関わる演出として神仏が登場したのに対して、享保期では開帳場を遊楽地として宣伝した。とりわけ二代目団十郎の演出は風流な男伊達や茶屋女を登場させることで劇場に集客や開帳イベントを盛況させようとし、元禄歌舞伎の神霊事とは根本的に違うものだったことがわかる。この違いが発生した原因としては、同時代における市場経済の発展や劇場の経営構造の成立も考慮すべきであろうが、ここではひとまず措く。次いで二代目団十郎と開帳興行を催す寺院の関係について吟味する。

②　寺院との関わり

服部幸雄氏が注目するように、成田山新勝寺が活発な布教活動を展開したのは、第一世照範上人が登場した元禄十三年からである[38]。既述の如く、その三年前に「兵根元曽我」が上演され、団十郎親子が成田山に参詣した。団十郎親子が大当たりを取った江戸での不動尊の演出は成田山の活動に影響を及ぼしたと考えられる。

二代目団十郎の日記には「此朝、成田山新勝寺ヨリ御礼、芝栗来ル、使僧来ル」（享保十九年九月十七日）とあり、成田山からの使いの者は団十郎に礼をいうために来たのである。これは享保十八年の出開帳に合わせ「桐栄山鳴神不動」を上演したことに対する礼か、団十郎家が何かを寄付したことへの礼かは未詳だが、寛保元年四月十七日にも成田山から初茸や栗などが届けられており、新勝寺の関係者が団十郎に直接連絡を取っていたことは確実である。そうした折、開帳に関わる趣向についての相談や交渉も行われたのではないだろうか。

日記には、その傍証になる成田山以外の寺院の開帳興行

との関わりについての記述が二件ある。一つは享保二十年の一月寺の和尚との関わりである。

団十郎の同年正月十日の日記に「一月寺の和尚へ徳弁近付に成る。義好殿引合」とあるように、三代目団十郎は尺八の師匠の紹介で一月寺の和尚と対面するようになった。江戸後期になると、虚無僧たちは尺八の演奏を独占するが[39]、三代目団十郎の尺八の師も一月寺の僧だった可能性がある。二代目団十郎が、享保二十年に息子に虚無僧を演じさせたのも、同時に開帳興行を催す一月寺の関係者と細かく相談したうえで創作した場面だったことが考えられ、このような演出は右に述べたように、場面が大当たりした一つの原因だったことも推測される。

ところが、寺院からの依頼も届いていたようだ。増上寺の下請けの学職寺である仏眼山浄国寺（武蔵国岩槻村・現在埼玉県岩槻市[40]）の開帳について、享保十九年八月六日の日記には「岩付浄国寺御来義、予在宿ニテ久々ニテ対面、明年四月開帳ノコト御頼也」とある。つまり、浄国寺の僧侶が団十郎の家を訪ね、翌年四月に行われる開帳興行に団十郎の協力を仰いだのである。そして、八月十九日に「内へ岩付浄国寺御来駕、予御目ニカヽリ、夫婦十念ウク。明日国へ御発足ノ由、イトマゴヒニ御出、クレ〳〵来年ノ開帳ノ御事御頼也」とあるように、盆狂言「根源今川状」の上演中にも浄国寺の僧侶が駕籠で市村座にやってきて、幕の間に団十郎と会い、団十郎夫婦に十念を授け、翌日の帰郷を伝えながら、再び翌年の開帳への協力を依頼している。九月八日には「浄国寺ヨリエンギ又歌行詩諺解三冊来ル」とあるので、浄国寺の縁起や『歌行詩諺解』（貞享元年刊）の三冊が届けられたようだ。

依頼したのは開帳に関わる場面で、届けられた縁起などはその演出の一助になるはずだった可能性もあるが、既述の如く、「振分髪初買曽我」が大当たりしたため享保二十年の五月まで続き、一月寺の開帳に関わる趣向が既にあったので、団十郎は浄国寺の僧侶が依頼した演出は不可能だったのだろう。しかし、団十郎家は浄国寺の開帳に四回（四月朔日、七日、十二日、十八日）も参詣し、開帳場だった回向院の蓮池に亀を放すなどしている。団十郎家の開帳参拝の際、立派な賽銭が期待されるうえに、彼本人が参拝するなら、大勢の贔屓もやってくるので、団十郎は参詣するだけで、浄国寺にはそれなりの利益をもたらしたのだろう。

第四章　不動明王の演技の定着

このように二代目団十郎は開帳の際に諸寺院と相談したと思われるが、享保期に演出したものは、遊楽地としての開帳場の宣伝や劇場への集客が狙いで、彼個人の宗教観とはあまり深い関係がなかったようだ。しかし、享保二十年の病後、開帳興行に関わる演出の中心的な立場にあった不動明王の演技が徐々に開帳興行の演出から独立するようになる。以下では不動明王の演技が団十郎家の芸として定着する過程について考察する。

既に享保十九年の評判記に不動明王は団十郎の「家の芸」として定義されているが、表1を見ると元禄十六年から享保十八年までの三十年間に二代団十郎は一度も不動明王を演じていない。それに対して、享保二十年の病気が本復した後は、七回も出すようになる。

おもに名残狂言として上演されるが、好評となるのは寛保二年正月に大坂佐渡島座で上演された「雷神不動北山桜」からである。

「雷神不動北山桜」は元禄十六年の「成田山分身不動」のように、鳴神上人は山に引きこもり、竜神たちを封印するが、国を救うために、雲の絶間は鳴神上に戒を破らせて龍神たちを解放する[41]。寛保二年の演出では鳴神上人は刺殺されるが、彼は骸骨として雲の絶間の夢の中に現れる。このために彼女は不動明王に自分や鳴神上人の魂のために祈り、不動明王が残る悪人を倒すうえに、雲の絶間や鳴神の両人の魂を救う。座元佐渡島長五郎は場面の成立について次のように語る。

四番め鳴神上人をやつこがころす事あり。詰に鳴神の亡霊、雲のたへまに、つきしだひがいこつの所作を思ひ付たり。栢莚生得狂言に切殺さるゝ事を忌てせず。予是をさせんと思ひ、四ばんめのがいこつの所、影法師にて拙者勤べしといひければ、左候はゞ殺され申べしと相談出来て、稽古云合済、（中略）しかし歌舞妓役者の殺さるゝ役を嫌ふもいか成事か。是とても妙なるべし[42]。

つまり、鳴神は奴に刺し殺されるが、骸骨を出す理由は、二代目団十郎が親から受け継いだ役を演じながら、舞台上で殺される演出は嫌だということである。鳴神の死で劇を終わらせないように、長五郎がこの骸骨を登場させる。骸骨はまた不動明王の登場を正当化したので、団十郎は舞台上に刺し殺される趣向に漸く同意したのだろう。長五郎は団十郎の態度を不思議に思うが、二代目団十郎は初代が市

村座の舞台で実際に斬り殺されたことを目撃したことを考えれば、気持ちがわかるのだろう（ちなみに、管見では二代目団十郎が演じたおもな役に舞台上で殺される演出の例が見当たらない）。すると、不動明王は劇中の登場人物を救うだけではなく、親のための祈りにも繋がる。そしてこの上演の準備期間中に病気になった三代目団十郎の全快のための祈りとしても捉えられるのではないだろうか。

佐渡島座座元長五郎の日記に「わざ〳〵大坂へ来る人、数を知らず。押も分られぬ大評判大入。京の数寄人は大坂にて見物したる人多し」とあるように、興行は大成功だった。上演は正月十六日から七月まで続き、推理小説のような筋や、磁石や骸骨などの仕掛けの工夫は大評判となったが、二代目団十郎はここで（子供の頃以外に）初めて好評の不動明王を演じた。この頃、漸く不動明王の演技に心理的な根拠を持ち、演技を磨きあげたから成功したのではないだろうか。

こうして不動明王の演技は団十郎の家の芸として定着する。宝暦四年の春に行う西大寺の江戸出開帳の時には曽我五郎の幽霊が矢の根の場面の中で不動明王を見立てるだけでも大当りし、中村座は西大寺にその姿が描かれた絵馬を寄付し、団十郎本人は中村座のために「矢の根五郎蔵」という衣装蔵と普請した程だった[43]。

市川家の下男と思われる池須賀山人は晩年の二代目団十郎と不動明王について、高雄山の不動堂に参詣した際、不動堂の和尚が「正身の不動尊の拝したきよしたつね」と団十郎の不動の演技を見たいと懇願したと述べている[44]。団十郎は断るが、やがて酒に酔ったうえ、「きせるを剣になしてもち火縄をばくの縄にもちて不動の尊容をうつしてにらみけり」その場で持つ物、煙管と火縄で不動の姿を見立てて集まる人々に正身の不動を見せる。二代目団十郎における不動明王は団十郎の代々伝わる家の芸や江戸の周辺の人々のためのアイコンとなっていたことがわかる。

まとめ

以上見てきたように、初代と二代目団十郎は出世のために不動信仰を用いた。初代団十郎は元禄中期から出現する不動明王ブームに合わせて不動尊を演出し、成田山新勝寺との関連に尽力した。二代目団十郎は享保期中にさまざまな寺院の開帳興行の宣伝や劇場への集客活動に協力し、開帳興行を演出する際には諸寺院と直接相談も行ったと推測される。しかし、享保二十年に大病し、本復すると不動明王の利益に感謝する口上を述べ、その時から不動明王の演

技が開帳興行から独立し、やがて「雷神不動北山桜」の時に市川団十郎家の芸として定着する。晩年には二代目団十郎と不動明王のイメージは強く結びつけられており、評判記『顔見世役者のくさめ』（宝暦四年十一月刊）にあるように、二代目団十郎は「成田の不動の第一息子」だったという伝説が庶民の中で広く認識されるようになった。

【注】

1　郡司正勝著「元禄歌舞伎における開帳の影響」（『国文学研究』七号、一九五二年）。

2　服部幸雄著「成田不動尊と代々の市川団十郎」（『市川団十郎代々』講談社、二〇〇二年）。

3　比留間尚著『江戸の開帳』（吉川弘文館、一九八〇年）。

4　いずれも『栢莚遺筆集』（大正六頃、早大演博本）に収録された。翻刻は『資料集成二世市川団十郎』（和泉書院、一九八九年）による。

5　伊原青々園著『団十郎ノ芝居』（早稲田大学出版部、一九三四年）。

6　注2と同じ。

7　享保二十年没。郡司正勝注『老の楽しみ抄』（『近世芸道論』日本思想大系61、岩波書店、一九七二年）。

8　愚蒙とも。江戸時代中期の僧。天和三年生まれ。祐天の甥。師の没後江戸目黒に祐天寺を建立、師を開山としてみずからは二世となった（『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一年）による）。

9　上原昭一、宮次男著『観音・地蔵・不動―民衆のねがい』（図説日本仏教の世界⑧、集英社、一九八九年）。

10　近仁斎薪翁著『古今役者論語魁』明和九年刊（郡司正勝注『近世芸道論』）。

11　『役者芸品定』享保七年正月刊（『歌舞伎評判記集成』、以下の役者評判記も同様）。

12　注5と同じ。

13　『役者福若志』（享保二十一年正月刊）による。拙論「二代目市川団十郎と劇所経営―享保十九年の江戸歌舞伎―」（『立教大学日本文学』一〇九号、二〇一三年一月）では、この舞台復帰の際団十郎の全快を宣伝するかわら版も刊行されたとした。『資料集成二世市川団十郎』や『かわら版物語』などにはかわら版は二代目団十郎のものとされているが、加賀佳子著「〈団十郎全快〉かわら版の刊行時期」（『芸能史研究』一二五号、一九九四年）では八代目団十郎のものであると考証されている。

14　『役者謀火燵』（宝永七年三月刊）による。

15　小松茂美、真保亭、島谷弘幸編『頬焼阿弥陀縁起：不動利益縁起』（『続々日本絵巻大成』伝記・縁起篇4、中央公論社、一九九五年）。

16　田中允編「泣不動」（『未刊謡曲集』続十九巻、古典文庫第五九八冊、一九九八年）。

17　注5と同じ。

18　表1は確認できる不動明王の上演、表2は開帳との関係が確認、あるいは推測できる上演の一覧。データは『歌舞伎年表』『歌舞妓年代記』『金の揮』『元禄歌舞伎傑作集』『歌舞伎評判記集成』『絵入狂言本集』国会図書館蔵の絵入狂言本集、同蔵『芝居紋番付』、ケンブリッジ大学図書館蔵『三座せりふよせ』をもとにしたものだが、これ以外の上演もあった可能性が十分ある。

19　比留間尚著「江戸開帳年表」（西山松之助編『江戸町人の研究』第二巻、吉川弘文館、二〇〇六年）。

20　伊原青々園は『市川団十郎代々』にはこの内容の初代団十郎の成田山新勝寺への祈願書が存在したという。口上の内容については高野辰之、黒木勘蔵編『元禄歌舞伎傑作集』上（臨川書店、一九七三年）に所収した絵入狂言本による。

21　横道萬里雄・表章注釈「調伏曽我」、『謡曲集』下（『日本古典文学大系』41、岩波書店、一九六三年）。

22　注16に同じ。

23　『金の揮』享保十三年刊（『資料集成二世市川団十郎』）

24　郡司正勝編『歌舞伎十八番』（『日本古典文学大系』98）。

25　成田山新勝寺史料集編纂委員会『成田山新勝寺史料集』第五巻（大本山成田山新勝寺、一九九九年）。

26　注1に同じ。

27　井原西鶴著『西鶴俗つれ〳〵』（元禄八年刊）の挿絵には「浅草観音開帳」という演目が見え、役者として玉村吉弥、市村宇左衛門、市川団十郎、今村粂之助、上村掃部、村山しつま、多門庄左衛門、小舞庄左衛門の看板も描かれているために、土田衛氏が挿絵は延宝期のものと考証している（「『歌舞伎年表』補訂考証、元禄篇其三」「愛媛国語国文学研究」第二二号、一九七二年）。『浅草寺史談抄』（金龍山浅草寺、一九六二年）によると承応三年や延宝五年三月、貞享四年、元禄五年には観音開帳が行われたが、演目と開帳興行の関係性については確定できない。

28　翻刻、漢字当て、句読点は著者による。絵入狂言本『愛護十二段』（国会図書館蔵）の文章は「あいこゆりひめの枕もとへわうじかつひめのおんりやう出さま〴〵あたをなすをそばなるによらいのみかげつるぎとなりこわたがまくらへおつれハこわたふとうになり二人のおんりやうをきりはらふこれもしんによたうみたのほうへんなれハかいてうせんとて」となっている。

29　拙稿「二代目市川団十郎と劇所経営―享保十九年の江戸歌舞伎―」（『立教大学日本文学』一〇九号、二〇一三年一月）。

30　『役者五重相伝』（享保四年三月）による。

31　網野宥俊著『浅草寺史談抄』（金龍山浅草寺、一九六二年）。

32　門前の茶屋について、シカゴ美術館蔵の浮世絵では「藤の茶屋」、大英博物館蔵のものには「てんまや」としているが、実際の浅草辺の茶屋との関係は未詳だ。

33　『吉原丸鑑』享保五年刊（『江戸吉原叢刊』第五巻、八木書店、二〇一一年）。

34　「三座せりふよせ」ケンブリッジ大学図書館。

35　『成田山新勝寺史料集』第四巻、一九九五年。

36　この状況について、本島知辰著『月堂見聞集』（第二十八巻）享保十八年七月「大坂、京都時行の風邪殊外厳敷、上親王宮方堂上不残、町々は老少不弁、十人位の処には十人ながら臥す、皆然り、依之七月十四五日斎念仏夥敷参候共、当年は干菜寺を始め一人も不参、朝暮町々を荷ひ諸色の物売の者も其数少し、見物遊山芝居殊外淋し、上旬の比より江戸街道へうつり、十三日、十四日には江戸中京店の者共、何百にても有次第、風邪相染難儀仕候」（森銑三、北川博邦監修『近世風俗見聞集』第二〜四巻『続日本随筆大成』別巻、吉川弘文館、一九八〇〜一九八二年）。

37　『開帳差免帳』享保二十年、国会図書館蔵。

38　注2と同じ。

39　武田鏡村著『虚無僧―聖と俗の異形者たち』（三一書房、一九九七年）。

40　岩槻市史編纂室『浄国寺日鑑』（『岩槻市史』近世資料編Ⅱ、岩槻市役所、一九八一年）。

41　歌舞伎台帳研究会編『歌舞伎台帳集成』第四巻（勉誠社、一九八四年）。

42　蓮智坊著『佐渡島日記』（郡司正勝編『歌舞伎十八番』所収）。

43　注24に同じ。

44　池須賀散人著『市川柏莚舎事録』明和六自序（『資料集成二世市川団十郎』）。

（立教大学大学院博士後期課程）